

リニア編集室2部屋の改修に伴い、Adobe Creative Cloud/Apple Final Cut Pro7をサブシステムとして編集室内に構築。両部屋間のファイル共有先として、EditShare社メディア・プロジェクト共有サーバー「Editshare Xstream HT 48TB」を採用。リニア編集システムからコントロール可能なファイルプレイヤーを紹介する事で、独自のワークフローを実現。



- ポイント**
- ・ノンリニア編集でのメリットを効果的にリニア編集環境に組み込んだワークフロー
 - ・持ち込まれる多種多様なファイル形式に対応出来ると同時に、ニーズに沿った柔軟な機材構成を選択出来た
 - ・十二分な実績と、且つ将来的に魅力あるソフトウェア。安定した運用を支えるシステムインテグレーター

TBS テックス様は、撮影・音声・照明・編集・MA・CG・デザインと、番組・映像制作に必要なあらゆる分野の揃った総合技術プロダクションです。リニア編集室2部屋の更新に際し、サブシステムとして Apple iMac による、Adobe Premiere/Apple FCP7 システムを構築。更に2部屋のサブシステム、及びリニア編集機器からコントロールされるファイルプレイヤーとの共有先として、安定した運用実績もある Editshare Xstream HT を導入、運用開始されました。

Adobe Creative Cloud は既に必要不可欠なツール

TBS テックス様では今回リニア編集の2部屋を改修され、それに伴いリニア編集サブシステムの位置付けで Adobe CC をワークフローの中核に組み込まれました。「番組編集ではリニア編集が依然として主流ですが、今後のファイルベース化を視野に入れた更新で、以前から After Effect を使用していた経緯もあり今回 Adobe CC を採用しました。」編集素材データの受け入れ、合成作業の増加に伴う After Effect 作業の増加、多種多様なコーデックと言うファイルベース特有の諸問題を、AdobeCC をサブシステムとして導入する事で、番組編集作業での高効率なワークフローを構築されています。「Adobe Premiere Pro で長手方向編集、After Effect 合成作業。タイトル入れはレンダリング不要なリニア編集で、と言う流れです。Adobe CC はリニア編集ワークフローをメインとする番組編集作業に置いて既に欠かせないソフトだと考えています。」TBS テックス様では早期から After Effects・Photoshop・Illustrator での連携で作業をされており、Premiere Pro 導入後も従来の流れを踏襲できる事が Adobe CC 採用の重要なポイントの一つとなっています。

EditShare XStreamが実現した共有ワークフロー

今回改修した2部屋の編集室のサブシステムファイル共有先として、VGI が提案した EditShare 社の XStream HT を採用されました。「ファイル共有を行うにあたり、周辺機器に縛られる事が無く、接続制限に囚われない、柔軟な構築が可能である事は、今回の大きな選定ポイントとなっているとの事です。ファイル共有は、PC 間のデータ移動を不要にし、平行作業もシームレスに行える事など、ノンリニア作業での高効率を実感しています。」TBS テックス様では、「必要な機能とパフォーマンスの高さを予算に見合う形で構成でき、今後の拡張にも柔軟に対応してくれたのが EditShare XStream HT でした。VGI さんのインテグレーションによる、Adobe Premiere Pro、Apple FCP7 での安定した運用実績も、我々の重要な採用理由となっています。」

<編集室内に構築されたiMac : Adobe Creative Cloud/Apple Final Cut Pro. 各部屋に2式を構築している>



■効果的なデロップ作成、マスク切り、更にはノンリニアならではのモザイク処理等、リニア編集室のサブシステムとして、抜群の費用対効果を生んでいる。様々な形式で持ち込まれる素材に対するAdobe Premiere Pro CCの開口の広さも大きなメリットポイント。iMacは各部屋に2式、それぞれ共有サーバーEditShareに1GbEで接続されている。

<リニア編集室奥に設置されたEditShare XStreamHT 48TB. 今後の仕様要求に合わせて拡張を予定>



リニア編集を加速するファイル共有ワークフロー

リニア編集とファイルベースワークフローをより効率的に接続する為に、共信コミュニケーションズ株式会社様より別途購入されました GrassValley T2 を、今回の共有システムに組み入れました。従来から使用されている優秀な機材を、EditShare XStream HT にダイレクトマウントする事により、ノンリニアサブシステムで作成した白完パケを EditShare XStream に保存すると同時に、GrassValley T2 をリニア編集機より RS-422 でリモートコントロールをかけ、ベースバンド出力する事が可能となります。「番組編集に置いて大量のテロップ入れ作業ではリニアの優位性はまだ高いと思っています。我々のワークフローを踏襲しながら、ファイルベース化に無理なく移行できた事は非常に満足しています。また FLOW など、将来的に魅力のあるソフト群 (MAM) もデータ管理の重要性を踏まえつつ、研究していきたいと思っています。

TBS テックス様における共有ワークフローの今後

TBS テックス様では今後の共有ワークフローについて、ネットワーク SW を軸にした汎用性の高いファイル共有ワークフローを考えていらっしゃいます。「今後のファイル共有で重要な点は、運用面とコストも含めて如何に効率良くネットワークを構築していく事だと考えています。巨大なセンターサーバー構想ではなく、フロア毎にサーバーを置き、我々の作業形態に見合う速度を求めながら、フロアを跨ぐ作業空間全体で柔軟なアクセスを行う事。分散型にする事でサーバーダウンによるリスクを最小限とする事。100Gbps と 1GBps の混在も現実味を帯びてきています。多様な接続に対応する Switch と EditShare で構築するネットワークは我々の今後の拡張案の軸になると期待しています。」

<リニア編集システムのメリットを、Adobe CCとEditShareによる共有環境の構築で更に効率化を加速>



<今回の改修を担当された、株式会社TBSテックス 榎原氏 (左) 山崎氏 (右) >



<複数リニア編集システム&共有ファイル・サブシステム接続概念図>

